佛教辞典

昭和九年五月十日印刷
昭和九年五月十五日發行

佛教辭典奥付

定價六圓

鑑修者　禿氏祐祥

發行者　京都市下京區四條通大宮東入立中町　伊藤嘉一

印刷者　京都市上京區新町通上長者町南　遠藤孝藏

發行所　京都市下京區四條通大宮東入　洛東書院
電話本局四七二四番
振替大阪六二三一七番

不許複製

序

近來百科辭典の出版が際立つて多くなつた。これは世の中が一般に忙しくなつて、どんな事でも簡單に短時間內に、手取早く要領を得なければならなくなつた爲めである。佛敎の研究でも昔の樣な唯識三年俱舍八年と云ふ樣な優長な遣方はそれ〳〵少數の專門學者に任せて置いて一般の人々は簡單な方法で調べなければならぬ。洛東書院の主人がこの點に著眼して簡單な佛敎辭典を計劃した事は誠に當を得た事である。自分は長い期間に亘り佛敎大辭彙の編輯に從

事し七八年を費して大正八年漸く完成した。大規模の佛教百科辭典として我國では最初のものであると申してもよい。かうした自分の經驗から佛教辭典の編輯は困難な事業である事を知り何れの場合でも同情を寄せてゐる者である。この度漸くにして出來上つた洛東書院の佛教辭典は極めて通俗的なもので、佛教に就て豫備智識のない者でもこの一冊を備へて置けば大抵の事は要領を得られる。小形ではあるが百科辭典風に作つてある。この種のものまた現代に是非なくてならぬものである。と申すのは佛教は世界に於ける一大宗教であり、また殊に東洋では最も普遍的な宗教であ

るからである。今これを基督教に比較して佛教の方が六百年ばかり長い歴史を持つてゐる。その教旨は一面から見れば極めて單純である樣であるが、歴史が長いから思索的方面でも、はた文藝、美術等の方面でも色々な方面に交渉を持つてゐて、佛教に關する智識が必要となる場合が多いのである。即ち佛教を信じてゐる人々も、また他の宗教を信じてゐる人々でも、東洋人であれば常識として佛教關係の事項を心得てゐなくてはならないのである。佛教に關する智識を得る爲めの第一歩としては名目の解釋である。即ち佛教特有の單語たる各種の名目を理解させるのが古來佛教

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

教育の初等科であり、これが入門であつたのである。この名目の解釋の上に近代的の百科辭典編輯法を加味して作られたのがこの辭典であると申すのは決して手前味噌でもないのである。

昭和九年五月六日

洛南深草の寓居にて

禿氏祐祥

凡例

一、本書は佛教興隆三千年の歴史と其の間に說論・教義・實現された總ゆる佛辭一萬餘を選錄し所謂佛家・宗教家・初學者と在家の有德・一般讀書家とを問はず採て以て心の糧とし、佛恩報謝の念を起し、佛教に關する實相を容易に接見味得せしむるを目的とした。

一、本書は諸天善神・佛菩薩・印度・支那・日本に於ける佛跡・靈山・佛寺・祖師高僧・行事等を收錄し明解なる解說を附し、佛教各宗の一大寶典たることを期した。

一、本書は佛教の根基である經・律・論の三藏に對し三國の菩薩・高僧の譯

疏はこれを網羅し然して三藏の術語、教義の如きは經・律は元より論義にして重複するものは一方を簡單に若しくは省略し明解を期した。

一、本書は佛天を始め三千の諸佛諸菩薩の慈悲・威德とその曼荼羅を解き、これが弘法に努められた佛菩薩・高僧の圖像を挿入し、初學者も容易に信解し得るやうせり。

一、本書は佛辭を平假名を以ていろは順に配列し、辭句の讀方は便宜上普通の發音に據り文法的音韻による煩を避け、更に五十音に據る索引表をも添錄して索引の簡易を期した。

一、本書は佛語・行事・供養その他の名稱にして各宗その呼稱と音訓を異にするものを詳細に配列することにしたが特に煩しきものは漢音一句中

に異稱を列記した。

一、本書は數字によつて略總稱されてゐる、彌陀の四十八願・藥師の十二願十二神將・三十三觀音・三十三天・六地藏・五智如來・五大力・四禪天・三福田等々各一願・一將・一佛・一天に就て詳細なる明解を期したが著名、必須ならざるものは其の數字の總稱のうちに解說、列記を加えた。

一、本書は靈山・佛寺の本名及び通稱、僧侶の上人・國師・大師號等每に辭句を立てることを期したが一部分はこの重複を避けて著名なる本名若しくは通稱を採つた。

一、本書は同一の辭句名稱に於て異れるものを併錄する場合は括弧【一】【二】を附し、通釋を要する場合は括弧（ ）又は1・2・3等の數字を用ひ明解

を期した。

一、本書は以上の趣旨に基き編纂したものであるから明解なる國譯大藏經・國譯一切經・佛教三千年史・三國高僧傳・佛跡堂塔案内記なりと稱し得るものである。

い

い 伊 ゆ

悉曇五十字門の一、十二韻の一。此字を稱ふれば一切法根不可得の理に契ふといひ、又諸根唐博の聲であるといふ。即ち根とは、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根をいひ、此等の諸根は絶對で、本不生であり、又此六根の體は宇宙に遍至し、萬有を具足して闕くる處がない。蓋し伊の梵音が、根の梵字 Indriya を聯想せしむるより、斯樣に釋したのである。

い 意

梵語末那 Manas の譯。思量すること。解釋に種別がある。(一)「具舍論」の說。1心を心意識の三に分ち、ものを思量する作用を意と名くる場合と、2意と識とを過去と現在に分ち、識が起る爲の根幹となる識、即ち現在の體が滅して過去に入つた前念の識をいうたもので、其體は別異のものではない。しかし五識は各々依るべき五根があるから、第六意識の依止となる意根を殊に意と名けた。(二)「唯識論」の說。八識並に其に附隨して起る心所の、前念に滅せるを意といふ一義は、俱舍に同じいが、而も第七識の特徴作用よりすれば、この識を意と名け、又、第六識の最も近き依止たる點で第七識を意と名けた。(三)「起信論」の說。三細六麁のうち、三細と六麁の前二を意といふ。即ち業識・轉識・現識・智識・相續識の五をいふのである。

いあんじん 異安心

一宗の祖師が定めた宗意安心と異れる安心をいふ。又、邪義・異計・異解・祕事などゝもいうてあるが、一は學解の異なるより起つたものである。眞宗では殊に安心を重要視する關係から、早くも親鸞時代から發生した。即ち有念無念、一念多念の論、本願ぼこり等があり、蓮如時代に十劫安心、善知識だのみ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

拜まず祕事等が唱へられ、降つて德川時代に入り、宗學研究が盛大なるに及んで、再び異義者が輩出し山命を以て所斷し能はざるものは、遂に幕府の裁斷を待つに至つた。即ち本派にては承德二年の西吟・月感の諍論を初め、寛政九年智洞の三業歸命を以て其最大なるものとし、大谷派にては明和四年越後の寂賢等の三業一致歸命、享和三年出羽の公嚴の邪義文化二年肥後の法幢の唯行無解、越後の龍山、能登の頓成、越前の是海等があり、高田派にては慶應三年の一九安心騒動は有名なるものである。猶、祕事法門は在家の善知識を中心に、祕かに傳播しつゝあるもので、現時尚侮る可からざる勢力を有する。

いあんらくぎよう　意安樂行

四安樂行（身・口・意・誓願）の一。心に嫉妬・諂誑の念を懷かず、學佛の徒を輕蔑せず、聲聞・緣覺・菩薩たらんと志す者を訶罵せず、戲論を交へて諍競せず、心安樂にして修養するをいふ。

いい　唉

禪宗で師家が學人を訓戒する時、又は導師が引導を與ふる時、意も言語も及ばざる極、發する語。

いおう　醫王

佛・菩薩をいふ。佛・菩薩が衆生の煩惱の病を癒し、悟りの境界に至らしむることは、恰も名醫が重患に對し、投藥して快癒せしむるに同じき意でいふ。

いがく　異學

修學を異にする、異門異流をいふ。

いかるがてら　斑鳩寺

【一】法相宗。大和國法隆寺のこと。【二】天台宗。播磨國揖保郡斑鳩村字鵤にあり、法隆寺の別院。推古帝十四年聖德太子の開創、天文十年兵火のため燒失僧昌仙の勸財に由て再興した。

いかるがのにじ　斑鳩尼寺

大和國生駒郡法隆寺村中宮寺のこと。

いぎ　威儀

【一】威のある儀容のこと。即ち一擧手一投足悉く規則に適ひ、方正にして崇敬の念を起さしむるに足る儀容をいふ。【二】五條又は袈裟を著用する時、背より肩をこえ胸前に至りて結ぶ平紐の紐。日本にて始まる。

いぎ　異義

異安心を見よ。

いぎかい　威儀戒

二戒（威儀・從戒）の一。外面的威儀を整へ他の尊敬を受けんとして、名利の念より受戒するをいふ。

いぎし　威儀師

授戒或は法會の時、戒檀院又は本堂にて他の僧侶を指導し、威儀を正す役目の僧。

いぎなん　維祇難

梵 Vighna 印度の人。譯して障礙といふ。初、事火外道を信じ後に佛教に轉じ吳の黃武元年竺律炎と武昌に來り『法句經』『阿差末菩薩經』を譯した。

いぎほそ　威儀細

淨土宗所用の袈裟の一種。禪宗の絡子に似て掛絡なく威儀細の細きもの。

いきぼとけ　生佛

生如來・生菩薩・今釋迦などゝいふ。高德の僧侶を尊敬し讃美する語。

いぎむき　威儀無記

四無記の一。吾人の行往坐臥總ての起居動作は善惡性何れにも屬せず無記性なるをいふ。

いきよう　違境

自己の身心に苦痛を與へ瞋恚を起さしむる如き、差

別的事象をいふ。

いぎよう　易行

難行の對。口にて南無阿彌陀佛と稱ふるをいふ。これ心身の勞苦を忍んで、佛道を修行するに比べて、容易なる行業の意。

いぎよう　意巧

意で種々に思ひ廻らし巧むこと。

いぎよう　意樂

梵 Aeyn 梵語阿世耶の譯。寫念樂欲の意で、或る目的に向つて進まんとおもひねがふをいふ。

いぎようしゆう　潙仰宗

南山禪五家七宗の一。唐の潙山靈祐を開祖とし、仰山慧寂が之を大成したものであるから、潙仰宗といふ。百五十餘年の後、宋時代に至つてその後系が絶えた。

いぎようどう　易行道

難行道の對。行じ易くして容易く悟境に到達し得る教法のこと。龍樹の著『十住毘婆沙論』易行品には諸佛・菩薩の名號を稱ふるを易行の法としたのに始まり、後、淨土教では彌陀の他力本願に乘托するを易行道といふに至つた。

いぎようぼん　易行品

一卷。南印度龍樹菩薩著『十住毘婆沙論』卷五の中より、抄出して流布せるもの。眞宗七祖聖教の一。法然が此書を傍明往生淨土論としたのは、元來『十住毘婆沙論』は『華嚴經』の十地品の解釋書であるのに由るが、親鸞は一論の祕要を探りて、念佛易行の教法を說くものとし、淨土眞宗に於ける重要なる典籍の一とした。

いぎようりゆう　意教流

東密三十六流の一。又意教の略字より、心文流とも

いふ。小野流の一派三寶院の成賢の門下、意教上人賴賢を開祖とする。後に又四流派を分出した。

いきりゆう　域龍

梵 Dinnāga 論師の名。梵名陳那、新因明學の初祖。

いきりよう　生靈

生存せる人の怨靈のこと。他に對し深き怨を懷き、生きながら惡靈となつて祟をするもの。

いくおうざん　育王山

支那の寺名。本名育王山阿育王寺、又廣利寺ともいふ。五山の一。禪宗では「イオウザン」と讀む。浙江省寧波府にあり、晉の泰始元年并州の人、劉薩訶が阿育王塔を此山に發見したと傳ふ。

いくどうおん　異口同音

多人數が一時に同一の音聲を發するをいふ。

いけ　異計

正統なる解釋に異なる、はからひのこと。

いけがみあじやり　池上阿闍梨

皇慶のこと。丹波の池上に住したので斯く名け、又谷の阿闍梨ともいふは、叡山の東塔南谷に住したによる。何れも住處に隨ひ名けた。

いけつ　恚結

九結の一。結は結縛の意で煩惱の異名。瞋恚の煩惱は殺生等の惡行爲をなさしめ、爲に三界流轉の結果を招き、解脫の時期なからしむる意味でいふ。

いけん　異見

正統とする解釋と異る見解。

いげん　已還

已來といふに同じ。等覺已還といへば等覺位の菩薩から凡夫地に至るまでを指す。

いげん　惟儼

支那山西省絳州の人。姓は韓氏、世に藥山といふ。十七歳の時出家し衡山希操に受學して後、石頭希遷の室に詣り次に馬祖道一に參じて言下に大悟し、留ること三年の後石頭に還り法嗣となり、尋いで澧州藥山に住して說法敎化した。唐文宗太和八年に寂す年八十四。弘道大師の諡號を賜ふ。

いこ　意許

因明にて用ふる語。自己の意中に置き、言語に顯はさざること。

いこう　已講

有職三綱(已講・內供・阿闍梨)の一。三大勅會の講師を歷仕し已りたる僧の稱號。

いごう　意業

三業の一。意のはたらきのこと。

いこん　意根

【一】十六根の一。前念の六識が滅して、後念の六識が起る據り處となる點で前念の六識といふが、五識には五根があるから、意根とは特に第六意識の據り處をいひ、之を意界又は意根界といふ。2吾人の心を前念後念に分ち、前念の八識心王をいふ。これ後念に起るべき總ての心的現象を開導すべき據り處となる意味でいふ。又第七末那識は、第六意識の最も近き據り處なる意味でいふ。【二】二十二根の一。六識と意根との七心界をいふ。

いごんぎょう　意近行

五受の中、憂・喜・捨の三をいふ。第六意識の爲に親緣となり、意識をして種々の作用あらしむるもの。五受を見よ。

いこんとう　已今當

已は已往、今は現今、當は當來の意。過去・現世・未來に同じ。

いさん　意三

十惡の中、意に起す三惡、貪欲・瞋恚・愚癡のこと。

いじ　意地

意とは第六意識のこと。此識は一身を支配し、又萬事を發生するから意地といふ。

いしか　伊師迦

梵語 Isika 野生の草の名。虎鬚と譯し、外見柔軟なるに似て內實堅きもの。

いしかわしようじや　石川精舍

舊址、大和國高市郡白橋村石川にあり。敏達帝十三年蘇我馬子が佛像泰安の爲に石川の自邸に建てた寺之れ我國寺院の濫觴で現時淨土宗本明寺がある。

いしき　意識

六識の一。八識の一。意による識の意味で、（意の解釋は六識說では、心・意を識の別名とするが、八識說では、心を第八阿賴耶識、意を第七末那識、識を前六識即ち第六意識と眼耳鼻舌身識に配當す）第六意識をいふ。

いじつせごん　爲實施權

天台宗の教義で、眞實の教法に歸入せしめん爲に假りに方便の教法を施設するをいふ。

いじのさんてん　伊字三點

悉曇文字の伊字の形は、三點より成るをいふ。其配列位置は、縱ならず橫ならずして、三角關係を有するから、不一不異・非前非後を說くに譬として用ひた。藏經中、元・明の二藏本は梵字八を出してゐる。

いしのはち　石の鉢

佛陀使用の器。佛が悟りを開かんとし給うた時、四天王が來りて各自青石の鉢を獻じた。佛は之を受けて重ね、按へて一鉢とし給うたといふ。弟子には使用を禁じたもの。

いしやまがつせん　石山合戰

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com